開催にあたって

地区会に寄せて―研究の活性化と絵画教育

美術科教育学会
代表理事
金子一夫（茨城大学）

新たな形の美術科教育学会地区会開催を実現していただいた関係者、そして共催団体として名を連ねていただいた大学美術教育学会、日本美術教育学会、和歌山大学美術教育研究会に御礼申しあげます。

この地区会開催に美術教育研究の環境が大きく変わりつつあることを感じます。かつて美術科教育学会の大会だけでは収まりきれない会員のエネルギーは、東西地区会やプレ学会で放出されていました。その後、所属機関の組織改革の波に多くの会員が翻弄されつつも蓄積した研究は体系を成し始めています。ただ、その体系はともすると研究者や実践者のエネルギーを整理・吸収して研究が惰性化する恐れがあります。ここで、新たな地平や領野を拓く試みが体系に揺さぶりをかけ、研究が活性化することを願ってやみません。

今度の地区会は、「〔絵画・以降〕の時代に構想する絵画教育」という複雑なテーマに正面から挑戦する意欲的なものであり、新たな地平を拓く試みと思います。

絵画の時代は終わったと言われたりもしましたが、美術教育の世界においては、やはり自然に絵画指導が実践されている場合が多いと思います。実践者が最新思潮に無関心であるというより、絵画にはそれだけ強いものがあるためと解釈します。私見では絵画の強さは思考や想像力の形式と似ているためではないかと思います。

また、近代日本だけでも150年近くの絵画教育の研究と実践の蓄積があります。それは絵画教育に関する大変興味深い考察の材料に満ちています。例えば、明治21年から23年にかけて京都や東京で初めての毛筆画教科書が発行されます。京都の毛筆画教科書は円山応挙の伝統を踏まえて実物分析を基礎とする課程に、それに対して東京のそれはフェノロサの反写生主義を踏まえて既存の作品様式を基礎とする課程になっています。いわば、実物からの絵画指導と美術からの絵画指導という、今日的な問題が既にあるわけです。

過去に今日的問題があることは、未来にも現在の問題が継続される可能性を意味しています。地区会の議論が現在と未来の美術教育の参考になると期待しています。

堂島からの発信―新たな地区会へ向けて

美術科教育学会
元代表理事
花篤　實（大阪教育大学名誉教授）

大阪維新の会ではありませんが、大阪から発信される会となると、いささかたじろかれるのではと危惧もされる昨今の時勢です。が、それだけにインパクトも与えられ得るのではと期待も持って、ともかくこの忙しい年末に曲げて御参集戴けます事に、厚く感謝申し上げます。

地区学会は宮脇さんが代表理事のとき、出前シンポとして教育現場の研究会との交流を図った後、私が代表になり会員の小発表会や情報交換を兼ねて、積極的な現場へのアプローチを図りましたが、共通出来るテーマや関心事の相違やタテ社会の構造もあって、なかなか困難であったのを思い出します。アメリカの大学等で、それこそ地域と結びついて研究会等を持っているのを見て、文化や伝統といった問題を越えても、やはり学会は積極的に社会に関わって行くべきだと思いますし、その意味でも今回永守さんを始めとして、関西圏の学会員が中心となって、地区会を立ち上げて頂いた事に同慶の意を表する他ありません。

この地は、ご存知の福沢諭吉の誕生地で、したがって慶應義塾大学のサテライトと共住しています。建物の前に流れる大川沿いに記念樹の松がありますが、そこはまた明治期に大阪教育大学の前身である大阪師範学校のあった所です。司馬遼太郎の『坂の上の雲』の主人公でもある秋山好古も学んだ所ですが、今回ご縁のあるいろんな人のご尽力を得まして地区会開催の場所としてお借りする事になりました。この場を借りまして関係者の皆さんに御礼申し上げます。

私もこの大阪芸術大学にお世話になっている時に、何回か立寄った事がありますが、今関係しているある財団のコンクールには何千という参観者が集まります。大川を渡って国立国際美術館や科学館にも立寄れる大阪の文化発信地の一つでもあります。この地区会の発足を起点に、学会のますますの発展、興隆とともに美術教育の一層の振興を願うものです。